

J A帯広かわにし（有塚利宣組合長）は来年度、帯広市別府町の同J A別府事業所に、「十勝川西長いも」を原材料にした冷凍とろろ製造工場を建設する。製造能力は年1000トン。とろろ製造国内最大手のマルコーフーズ（埼玉県深谷市）に製造委託する。

建設場所は同事業所敷地内のナガイモ選果場の西側。同J Aが床面積990平方メートルの平屋建ての工場を建設。とろろ製造、急速冷凍、袋詰めなどの機械を整備する。製造能力は1日4トン、年間1000トン。事業費は計11億4280万円を見込む。国の補助事業を想定し、来年度中の完成、操業開始を目指す。

原材料のナガイモは、帯広かわにしなど9J Aが生産する「十勝川西長いも」の規格外品を活用する。生食用の出荷規格に満たない400グラム以下のナガイモを、同事業所の選果場で洗浄、皮むきして、新設する工場に出荷する。

同社は、工場を賃借して製造業務を受託。すり下ろし、包装、急速冷凍、保管を行う。製品は、同社の関連会社のヤマトフーズ（同）が、国産とろろの需要が増えている全国の外食店などに販売する。

マルコーフーズは埼玉県内での製造機能の4分の1を帯広市に移転。産地で原材料の安定調達と、専用工場でのコスト削減を図る。同J Aでは、規格外品の活用で生産者の所得の2割向上を計画する。現在も出荷している地元のとろろ工場との取引は続ける。

十勝川西長いもは、年間約2万トンの生産量のうち大きいサイズを中心に15%程度を輸出し、国内流通を調整して相場の安定を図っている。

とろろ工場の新設は、数年前までは畑に捨てていた物もあった規格外の販売強化策で、同J A青果部の常田馨部長は「販売戦略の集大成。畑でできた物はすべて売ることができる体制になる」としている。

小袋豆工場も新設

J A帯広かわにしは7日、同J A本所で臨時総代会を開き、2017年度の事業計画などを決めた。西帯広事業所に小袋豆工場を新設し、多品種小ロット生産ができる体制を整える。事業費は約4億円。

大手スーパーなどの小売店向けに小豆や大正金時などを計量、包装する小袋豆製造は、現在の工場が手狭なため、敷地内に新設する。ジャガイモ選果場を改修し、新たな製造ラインを導入。小売店からの要望が強い、少量多品種の製品を生産する。同年度内の完成を目指す。

J Aめむろ 4店閉鎖へ 農村地区

2017年3月23日

【芽室】J Aめむろ（辻勇組合長）は22日の臨時総代会で、上美生、坂の上、川北、北伏古の4店について2018年3月末で廃止することを賛成多数で決めた。

4店をめぐる同J Aは当初、組合員の減少や道路整備が進み、設置当時の役割を終えたとして15年3月末で廃止する方針を固めていた。地域の組合員らから存続を求める声が多く、廃止時期を18年3月末に修正し、14年4月には貯金・組勘業務を廃止して各店にA T M（現金自動預払機）を設置するなど縮小してきた。

存続を望む声強い上美生地域では、上美生地区協議

会とJ A上美生運営協力会の呼び掛けで昨年11月に「上美生のお店を考える会」を立ち上げ、J A撤退後の店舗の存続の可能性や施設の有効活用を探っている。2月にはガソリンスタンドとA T MをJ Aの直営で残すよう要望していた。

同協力会の須崎潤一会長は「分かっていたとはいえ残念。廃止後の対応について今後もJ Aと話し合い、地域のためにより良い形になれば」と話す。辻組合長は「本部機能の中で全組合員を対象とした対応を考え、8月までに一定の方向性を出したい」としている。